

共倒れ防ぐギリギリの道 「何をおいてもまず逃げる」

教えは「津波てんでんこ」

この地に伝わる「てんでんこ」という方言がある。「てんでんばらばらに」という意味だが、もう一つ、津波の際には何をおいても一目散に逃げる、という教訓を伝える言葉でもある。

この「津波てんでんこ」を広めたのは、岩手県大船渡市出身で津波災害史研究者の山下文男さん(87)だ。

その著書などによると、3000人近い死者を出した昭和の三陸津波(1933年)で、山下さんの父は小3の山下さんらを置いて逃げたとい

う。「子供の事もひかずに自分だけ逃げて」とからかう母に、父は「(津波のときは)てんでんこだ」と照れ笑っていた。父は死者2万人を超えた明治の三陸津波(1896年)で、乳飲み子の妹を抱えた母(山下さんの祖母)を亡くしている。山下さんは「共倒れを防ぐための心がけ」として、あえてこの経緯を説いて回ったのだ。

その山下さんは、今回の地震当時、陸前高田市の県立高田病院に入院していたが、助かった。知人によると、4階の窓から外を見ていたが、津波はその4階の窓をも突き破り、山下さんは水が一瞬、ひいた時に職員に助け出されて屋上に避難した。現在、体調を崩し盛岡市の病院に入院している。「まさかあそこまで波は来ないだろうと思った。頭では分かっていたつもりだが、津波を甘く見ていた」と振り返っているという。

ノリ子さんも結婚した1960年、三陸一帯を襲ったチリ地震津波を経験している。死者は1000人を超えたが、津波は陸前高田駅の線路付近までで、高田松原のマツによじ登って助かった人もいたという。「津波の恐ろしさはみんな分かっていたけれども、あの津波を経験した世代は、逆にここまでは来ないと思ひ込んでいたのかもしれない」

武安さんは「実は、避難せずに家で後片づけをしようと思っていたんです。あの時、息子が手をひいて一緒に逃げてくれなかったら……」。その後明さんは「最終的には、自分の命は自分で守るしかない」と語る。

「津波てんでんこ」。この方言が教えるのは、「津波が来たら、とにかく高いところに逃げる」というメッセージに尽きる。だからこそ私たちは、そこに潜む三陸の人たちのギリギリの思いを感じ取らなくてはいけないと思う。